

2023年12月26日

山形大学 IR 担当者向け実践プログラム 第5期実施状況の評価および次期実施方針について

藤原宏司(山形大学)・山本幸一(明治大学)

2023年11月17日開催の「山形大学 IR 担当者向け実践プログラム自己点検・評価委員会」の実施結果をもとに、第5期における実施状況の評価をまとめ、次期の実施方針を策定した。

1 実施状況の評価

(1) 募集対象・受講者の受入れ

- 本プログラムは、大学等に勤務し、IR 関連の業務経験が2年未満の方、あるいは、今後、IR 関連の業務に就くことを希望されている方を対象に開講している。
- 定員は、実技・実習を伴うことから、12名程度を上限とし、当期は10名を受け入れ、9名に対して履修証明書を交付した。

(評価)

- ・ 修了生インタビューからは、個々の課題等に対する講師からのコメントや個別面談でのフィードバックが有益であったとの意見があり、効果的な指導を行う上で、適切な受講者数であったと言える。
- ・ 完全オンラインプログラムであるため、全国からの受講を可能とする環境を履修者に提供できた。そして、当期は海外の大学に勤務している受講者を受け入れたことが特筆される。

(2) 到達目標・達成状況

- 本プログラムは、IR 担当者に必要な5つの要素（高等教育機関を取り巻く文脈、アセスメント、データマネジメント、データ分析、情報提供(Data Storytelling)）に関する基礎的な知識・スキルの涵養を目標として実施した。
- 上記5つの要素を体系的に学習できるよう提供科目を整理した（自己点検・評価委員会配付資料4を参照）。全科目を履修し、関連する課題に合格することで、上記5つの知識・スキルを修得できるものとした。
- 修了要件は、以下の通りである。
 - ・ 履修期間内に、全ての科目を履修し、関連する課題に合格すること
 - ・ 最終成果発表会である「IR192：IRプロジェクト(2)」において、一定以上の成績を修めること
 - ・ 山形大学 IR 担当者向け実践プログラム運営委員会による修了認定を受けること
- 「IR192：IRプロジェクト(2)」では、「異なる視点の分析を3点以上取り入れること」等の採点基準（ルーブリック）を受講生に事前公開し、4名の講師陣による総合評価を行った。

(評価)

- ・ 最終成果発表会では、全員が一定以上の成績を修め、本プログラムの到達目標である上記5つの要素に関する「基礎的」な知識・スキルの修得を確認できた。しかし、IR業務の実践で必須となる「探索的データ分析(EDA)」等の応用的な分野については、受講生の間で理解にバラツキが生じており、改善が必要だと思われる。
- ・ 修了生インタビューからは、受講生自身の満足度、同僚・他者への本プログラムの推奨度は高く、受講生のニーズに合わせた授業が実施できたと思われる。
- ・ 外部評価委員からは、5つの要素として整理した到達目標に関しては理解できるが、各要素の評価基準については、もう少し具体化等の工夫が必要ではないかとの指摘があった。
- ・ 以上を踏まえ、最終課題の評価基準に含める事項をより明確化するとともに、科目の履修順序を再構築し、順序よく最終課題に向けて、知識・スキルを獲得していく等の改善策を講じる必要がある。

(3) 教育課程(提供科目)・授業方法

- 教育課程として、「IR入門」、「IR応用」、「データマネジメント&分析(DMA)」、「IR実践」の4分野を中心に、「ゲスト講演その他」を加えて編成した。
- オンデマンド型の講義動画と、月に1回週末に開催されるリアルタイムオンライン授業のみで本プログラムを実施した。
- LMSとして、Microsoft Teamsを利用し、オンデマンド型講義動画の配信、本プログラムからのアナウンス等を行うとともに講師・受講生のコミュニケーションの促進を図った。また、リアルタイムオンライン授業ではZoomを使用した。
- 授業方法として、講義と実習を採用した。実習では、「R」や「Microsoft Power BI」等を用いて、データマネジメント、データの分析・可視化、報告(レポート作成、プレゼンテーション等)を扱った。その他、授業時間外課題を課している。
- 当期における学習時間は約90時間(講義73時間、授業内課題・演習等約17時間)であり、おおよそ従前と同様の時間数であった。単位制に換算すると約2単位相当になる。
- リアルタイムオンライン授業では、個人によるプレゼンテーション発表の他、受講生同士によるクリティーク等のグループワークを行った。
- 受講生のうち希望者に対しては、中間インタビューおよび修了生インタビューを行い、個人発表への詳細なフィードバックを行った(1回1時間程度)。

(評価)

- ・ DMAにおけるデータ処理・分析演習では、米国で実施されている同様なIR履修証明プログラムの調査結果(藤原, 2015)より、「受講生全員が同一のデータセットを繰り返し活用する」こととした。修了生インタビューからは、同一の教材を利用することにより、クラスメイトの発表から自身の改善点が明確になったとのコメントが寄せられた。加えて、教材の反復利用により、自身のプレゼンテーションにおける改善が可視化され、モチベーションにつながったとの感想もあり、効果的な授業方法であったと思われる。
- ・ 受講生によるプレゼンテーションを講師だけが評価するのではなく、受講生同士が、前向きな観点でアドバイスしあうことによって、他者のプレゼンテーションから学ぶ機会も提供できた。
- ・ 本プログラムは学習時間を60時間としているが、近年テクノロジーは急速に進化しており、常に最新の情報を提供する必要があるため、若干学習時間が増

えている。修了生の中には100時間以上学習したという受講生もいたが、学習時間に不満を示した受講生はいなかった。

- ・ オンライン上でのグループワーク等を取り入れたり、Teamsによるコミュニケーションを推奨したりしたものの、修了生インタビューからは、受講生間のコミュニケーションが醸成しきれなかったとの指摘があった。
- ・ 外部評価委員から、エグゼクティブサマリーは素早く簡潔な理解を促し、プレゼンテーションにおいて常に意識させる必要性について指摘があった。
- ・ 修了生インタビューにおいて、プログラムの序盤に講師・受講生全員のコミュニケーションを深めるための時間を設けるべきという意見に加えて、RやPower BI等の実技系科目を早めにスタートして欲しいとの要望に対応していく必要がある。

(4) 受講料・所属機関からのサポート

- 受講料（15万円）については、自己負担した者が予想よりも多い状況であった。
- 所属機関が受講料を全額または一部補助してくれた場合でも、研修としての参加と、自己研鑽としての参加の2種類があった。
- 修了生インタビューからは、以下のようなコメントがあった。
 - ・ 当初は高額と感じたが、総合的な満足度は高い。
 - ・ 学習量を考慮すると、コストパフォーマンスは良いと思う。
 - ・ 他の高等教育関連機関が実施している有料の講習等と比較すると妥当な金額だと思うが、これ以上の値上げは止めて欲しい。
 - ・ 自己負担の受講生のため、厚生労働省の教育訓練給付制度の対象プログラムになって欲しい。

(評価)

- ・ 経費と教育効果との兼ね合いから、現状では妥当な定員、授業料の設定になっていると思われる。
- ・ 自己負担の受講者が一定数いることから、何らかの対策が必要である。具体的には、厚生労働省による教育訓練給付金制度の対象プログラム（2025年度より）への申請に向けて、募集要項の変更等が急務となる。

(5) 社会人の受講に向けた工夫・配慮

- 前述の通り、オンデマンド型の講義動画と、毎月1回4~5時間程度、週末に開催されるリアルタイムオンライン授業のみで本プログラムを実施し、社会人にとって受講しやすい環境を提供した。
- 当期から、「文部科学省職業実践力育成プログラム（BP）（テーマ：DX）」の認定を受けた。
- 修了生インタビューからは、（所属大学における研修の申請において）プログラム全体の詳細な学習内容や、スケジュール感が分かりにくいとの指摘があった。また、プログラムの詳細を記したPDFファイルを提供して欲しいとのリクエストがあったため、次期からは、第1期等で作成していたリーフレットの簡易版の作成を検討する。

(評価)

- ・ 学校教育法に基づく履修証明プログラムとして学長名による「履修証明書」を授与できる、IR 分野では日本唯一の人材育成プログラムであり、受講者に公的な証明書を交付している。
- ・ 社会人にとって受講しやすい環境整備に配慮した結果、北海道から九州、さらに海外からの受講生を得ることができた。
- ・ 講義スケジュール(講義期間も含めて)の全体的な見直しが必要だと思われる。
- ・ 受講生が所属機関から金銭的な補助や労務面での支援を得ることができるよう、本プログラムの募集期間や学習内容等の詳細な情報公開を早期に行う。また、上述の本プログラムに関するリーフレット作成についても前向きに検討を行う。(予算との関係があるため、現時点での断言は不可である。)

(6) 当期におけるカリキュラムの改善について

- 修了生が講師として本プログラムに参加し、学習上のアドバイスや学習コミュニティの構築に貢献した。
- 修了生が本プログラムで体得したことをその後の職務にどのように活かしているか等を随時、語ることで受講者のモチベーション、特に受講後のイメージを具体的に描いてもらえる工夫をした。

(評価)

- ・ 講師として参加した過去期修了生からの「Excel を活用したデータ分析の実践」や「IR 担当者としてのデータの見方」、「本プログラムでの学びをどのように実務に活かしたか」等、実際の経験に基づくアドバイスは、当期受講生にとって、とても有益であった。
- ・ 受講者にプログラム修了後のイメージ、学習内容の活用イメージを理解させることは大切であり、「DMA101_01_R を勉強するメリット」、「DMA104_エクセルによるプレゼンデータの分析例」、「DMA104_プレゼンテーション発表会の分析例」等、IR の活用例を示した講義を行い、受講生のモチベーションの維持、向上にも役立てた。

(7) その他

- 特別聴講生(本プログラムにおける過去の修了生)から、修了生ネットワークの活性化について提案があった。
- 修了生インタビューからは、R によるデータマネジメントや Power BI の応用編についての講座開設について要望があった。
- 本プログラムが提供するコンテンツの高度化を目的として、山形大学及び包括協定を結ぶ明治大学に加えて、他大学の教職員に協力をいただき、IR における実践経験豊富な講師陣を組織した。

(評価)

- ・ 2023 年 10 月 20 日(金)、対面・オンライン併用の記念イベントを開催、総修了者数 51 名のうち約半数が参加し、現状報告、情報交換を行った。また、2023 年 12 月より、Discord(コミュニケーションツール)を導入し、修了生ネットワーク強化及びコミュニケーションの活性化に取り組んでいる。
- ・ 多数の修了生から応用編の開講要望があるものの、現状の実施体制では実現が困難であるため、体制強化等を検討していく必要がある。

2 次期（第6期）実施方針について

（1）募集対象・受講者の受入れ

- 第6期終了後、厚生労働省へ教育訓練給付金制度の申請を予定する。そのため、従来、高等教育関連機関に勤務していることを応募条件としていたが、条件を緩和して、より広く受講者を募集できるようにする。

（2）到達目標・達成状況

- 到達目標への達成状況を詳細に確認するための評価基準をより明確に定める。

（3）教育課程（提供科目）・授業方法

- エグゼクティブサマリー科目を、プログラム前半に行う。
- プログラムの序盤に講師・受講生全員のコミュニケーション醸成を目的としたアクティビティを行う。
- 第6期からは、新しいデータ分析セットを用いる。
- Rによる表作成に関する科目を新設する。
- RやPower BI等の実技系科目をプログラムの序盤から開始する。
- 個別の中間インタビュー（第2回プレゼンテーション発表会后）の必修化およびプログラム修了時にエッセイを課す。

（4）受講料

- 受講料そのものは据え置くが、2024年秋を目途に、厚生労働省へ教育訓練給付金制度への申請に向けた準備を進め、受講者の負担軽減に寄与できるように努める。

（5）社会人の受講に向けた工夫・配慮

- 第6期の募集期間や学習内容等の詳細な情報公開を速やかに行う。
- 本プログラムの概要を説明するリーフレット（PDF版）の作成を検討する。
- 社会人が無理なく受講できるよう受講期間を6か月間から、7か月間に伸ばす。

（6）カリキュラムの改善

- 第6期においても継続的なカリキュラムの改善に取り組む。

（7）その他（修了生ネットワーク等）

- 引き続き、修了生ネットワークの活性化に取り組む。

以 上